

---

# 私の弟姫

赤井 鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の弟姫

### 【著者名】

赤井 鈴

N4542M

### 【あらすじ】

容姿端麗、成績優秀、運動も結構できる高校一年生、速水深雪。彼女はひとつ年下の弟、千広を溺愛していた。ある日の朝、いつものように弟の部屋を訪れた深雪。だが、そんな彼女の目に飛び込んできたのは、弟によく似た女の子！？

## 第一話 ある日の朝の出来事

時刻は午前六時三十分。息を殺し、足音をたてないよひと氣を付  
けながら私は可愛い可愛い弟の部屋に向かつ。そつ、起ひたなによ  
うに……。

無事ドアの前に到着。ここからは今まで以上に慎重にことを運ば  
なければならぬ。

トン……トン……

「……千広？ 起きてる？」

軽くノックをし、小さな声でまだ寝ている筈の弟に尋ねてみる。

返事がないところをみると、予想通り寝ているようだ。  
まずは第一関門の突破に成功。

「……入るね？」

私はそつとドアを空け、部屋の中に身体を滑りこませた。

千広の部屋は非常にシンプルで勉強机とベッド、そして本棚がひ  
とつだけで、あとはクローゼットがあるくらいだ。「じちや」「じちや」  
た私の部屋とは対称的である。だが、それ故に薄暗い早朝でも歩き  
やすくて助かるのだ。

「寝てる……よね？」

ここで起こしてしまっては全然が白痴になってしまふので、私は  
は慎重にベッドに近付いていく。そして……到着。ミッションコン  
プリート。

そこには、すーすーと穏やかな寝息をたてて眠る千広の顔。今日  
も可愛いらしい寝顔を見せてくれる私の愛しい弟。

これは私の日課であり、至福の時間だつた。

一十分程過ぎただろうか。名残惜しいがそろそろ起こさないと田  
覚まし時計が鳴ってしまう。それは駄目。だって、この子を起こす  
のは私の役目だから。

私はいつものようにそつと千広の身体を揺すって起こす

「千広、朝だよ？ 起き」

箸だったのに。

むにつ

「あれ？」

なんだか変な感触が？

違和感を感じ、そつと掛け布団をめくつてみる。と、見慣れたチ  
エックのパジャマと見慣れない胸元の膨らみが田につけた。

「…………」

えーと、これは何だらう？ スズが潜り込んだのだらうか？ だ  
としたらなんて羨ましい……

ちなみに、スズといつのまづかでペットとして飼っている子猫の  
ことだ。

私は確認のために軽くその部分をつついてみることにした。

「うう……ん」

「つー？」

千広の口からなまめかしい声が漏れる。……もう一回。

「んつ……」

「…………」

「ぐくり。

あ、いや、これは確認のためだから。そう、あくまでこれは確認  
に必要だからやっているだけ。大事なことなので二回言わせて貰い  
ました。

……ところで私は誰に言い訳してるのだらうか？

「スズじやないみたいだけど……」

ならば何なのか？ それには開けてみないとわからない……よ

ね？

千広のパジャマのボタンをひとつひとつ外していき、胸元にかかっているだけになつた布を横にずらす。そして、現れる白い肌。つまり、何も入つていなかつたことになるわけで……。

「千広に胸がある？」

…………えつ？

「ええええええええつー？」

気が付くと私は大きな声で叫んでいた。

目の前の光景が信じられなかつた。

昨日までは確かになかつた筈だ。

何度も見て、何度も触れてきた私が言うのだ。間違はない。千広の胸にあんな脂肪の塊は絶対になかつた。

それなら今、私の目に映つているこれは何なのだろうか？

「……女の子の胸よね？ 本物？」

「何が本物なの？ 姉さん。というか、朝早くから人の部屋で騒がないでほしいんだけど……」

「めんね、千広。朝からつむかかったよね。

……あ、ついでに、近所の畠をまもすみませんでした（棒読み）。私の声で田を覚ましたらしき千広は、眼たげな田を擦りながら身体を起こし、こちらを見てくる。

あ、そのどちらとした田で見られたらお姉ちゃんもひつ……。

「……姉さん？」

「ひやいつ！？ な、何でもないから、何でも。……じゃないわ！ 千広、胸、胸！！」

「胸？ ……姉さん、何でボクのパジャマがはだけてるの？」

「そこはいいから、胸見て！…」

そこは気にしないでいいの。ええ、本当に。

「えつと、なんか腫れてるね。女の子みたい」

そう言つて自分の胸を揉みだした千広。その度ごとに、その柔らかそうな胸が形を変えていく。

……見てたら鼻血が出てきた。

やがてその手の動きが止まると千広は向ひを考へ始める。そして

「……お休みなさい」

再び布団の中に潜り込んだのだった。

「千広！？ 大丈夫！？ しつかりしてつ！…」

「ん~、大丈夫だよ姉さん。ここはまだ夢の中だから起きたらきっと元通り」

「……なるほど」

そうか、ここは夢の中だったのか。それなら千広に胸があつても仕方がない。仕方がないったら仕方がないのだ。

ならば、私がこの後することはただひとつ。

「ねえ、私も一緒に寝ていいかな？」

「うん、いいよ。どうせ夢だから……」

よつしゃつ！… 言つてみるものだ。夢の中とほこえ、千広と一緒に寝るのはずいぶんと久しぶり。ところが、もうこのまま夢から

覚めないでほしい。

「お邪魔しまーす」

田覚まし時計を鳴らないようにして、意氣揚々と布団に潜り込む私。夢の中の筈なのに、千広の温もりが不思議と感じられた。

まあ、結局夢じゃなかつたんですが……。

朝御飯と呼びにきた妹の舞によつて、私の幸せな時間は僅か三分で幕を閉じられたのだった。

……くすん。

ちなみに、鼻血で枕を汚してしまったのは秘密。

## 第一話 家族裁判

「それじゃあ、まずはあなたの名前と年齢を教えてもらひたるかしら？」

「……速水千広、十五歳。高校一年生です」

「じゃあ、家族構成は？ 名前までお願ひね」

「父の直樹、母の沙希。ひとつ上の深雪姉さん。中学一年生の妹の舞。それと小学三年生の弟の優に、子猫のスズの六人と一匹の家族ですけど……」

今現在、女の子になってしまったと思われる千広の本人確認をお母さんが行っていた。

さつき姉さんと呼ばれたので私は普通に千広だと思つていたけど、言われてみれば別人かもしぬれないのよね。

でも、あの絹のように艶やかな腰まで伸ばした黒い髪も、どう見ても女の子としか思えない可愛らしい顔も、そして透き通るような白い肌もみんな同じ。千広と同じ。

「じゃあ母さんが父さんと出合つた成れ染めは？ これは千広にしか話してないんだけど」

「……」

「あら、わからない？」

「いや、ここで言つていゝのかなつて思つて……」

なんだか言いにくそうに千広？ はお父さんの方を見ている。

……あれ？ なんだかお父さん顔色悪い？

「じゃあ私の耳元でなら話して貰える？」

「うん……」

母さんにだけ聞こえるように何かを喋つてゐるけど。……気に入る。すごく気になる。舞と優も同じ気持ちのようだ。

やがて、話を聞き終えたお母さんは満足気に言つてくれた。

「うん、間違いなく千広ね。ごめんなさい、疑つてしまつて……」

『文選』卷之三

よかっただ……。せひまつりのトトロは千匹だったんだ。たとえ女のトト

でも私はまだ胸しか見てないけど、トとかはどうなん  
ん?

だろう？

「ねえ、他に違うところはあるのかな？」

「う、うん。たぶん下の方も女の子になつてゐる」

「たぶん？」

まあ（ボツ）。

「アーニー、お前がアーニーだよ。」

「一応、学校には行つておひつかなつて……」

「そうか……まあ、千広が自分で決めたのぢ

無理はしちゃ駄目だよ?  
いいからね?一  
気持ちの整理がつくまで学校を休んでも

「うん」

お父さんが心配するのもわかる。だって、千広の表情は暗いから。

「千広」

お父さんは席から立ち上ると、千広の背後に回った。そして優

シベリヤの旅

ちょっとだけ、羨ましいと思つた。

.....えつ？ もひるさんお父さんがですか？」

「いいかい？ 千広。男の子でも女の子でも、お前が父さんと母さんの大事な子どもなのは変わらぬことよ。だから、怖がらないで」

「あつ……」「……」

「父ちゃんと母ちゃんだけじゃない。深雪も、舞も、優も、みんなお前の味方だから。…………おつと、ごめんごめん。ズズもだね」

「こや～ん」

自分を忘れるなどでも言つてこなのよつにスズが鳴いてみせた。  
「辛い時はいつでも頼つていいからね？ お前はひとりじゃないよ」

「…………ありがとう」

少しだけ千広に笑顔が戻つた。そんな気がした。

「いいとこ取りだよ、お父さん。でも、ありがとう……」

うん、私は千広の味方。ずっとずっと守つてあげるからね。

「じゃあ、家族の絆を深めるために今夜は一緒にお風呂に入りうつか  
？ 千広」

うんうん。家族の絆を

.....あれ？

「いや～、それにしても女の子か……。これで長年の夢が叶つた。  
楽しみだな～。娘に背中を流してもらひのせ父親のロマンだからね

」

なんだか話が違う方向に飛んでるよつな気が？ どうか、私と  
舞は？ お父さん的に私たちは女の子としてアウトなのー？

一緒にいる気は全くないけど、こくらなんでもあんまりだ……。

「うふふふ、あなた？」

あ……、お母さを怒つてゐる。すぐ怒つてゐる。

「ま、待つてくれ沙希。これは、その……」

「あなたたちはどう思つ?、母さんは有罪だと想つただけど」

「有罪」

と、舞。

「有罪?」

と、優。たぶんよくわかつてないと想つ。

「有罪ね」

私も有罪に入れる。乙女のプライドを踏みにじつた代償は重い。

「いやう?」

うんうん、有罪だよね?、スズ。よくわかつてゐじゃない。

「あら、スズもお父さんは有罪と思うの?、これで全会一致で有罪となるわ。ペナルティとして、今月のおじづかには無しよ?、あなたた」

「あんまりだつ!、」といふか、スズはノーカウンタージャないのかな!?

「お父さん酷いよ。スズは大切な家族の一員なんだよ?、ね?、スズ?」

「いやーん」

そう言いながら、舞は千広の膝の上に座つていたスズを抱き上げる。

……グッジョブ、舞。

「……誰も味方はいないのか。無念」

よよよ、と泣き崩れるお父さん。ちょっと気持ち悪い。

「あの、ボクは別にいいけど……」

甘いわ、千広!、女の子がそんなに無防備じゃ駄目なんだからね?

「うなつたら私が一緒にお風呂に入つてしつかり教えてあげないと……。」

「ほら、千広本人がいいつて」

必死なお父さんを

「「「黙れ」」

「……はい」

一喝。

とりあえず、私が一番最初に守るのはお父さんからになつそうだ。

それよりひとつと千広から離れる、この ピー——— がつ——！  
(おおよそ娘が父親に向かつて言ひよつた言葉ではないため、自  
主規制とさせていただきます)。

## 第二話 学校へ行け

『ん……、あつ。か、母さん……』  
『もうちょっとだから我慢しなさい? ほら、母さんに任せて力を抜いて』

『う、うん。……痛っ』

朝ご飯を食べ終え、お父さんを仕事に送り出した（追い出した）後、千広は服を着替えるからと部屋に戻って行った。その際、まだ自分の身体に慣れてない千広のために、お母さんが付き添っている。そして、ここは千広の部屋の前……。

『あと少し、もう少しだから。頑張つて』

『でも、ボクもうつ』

『んつ、ほりつ、全部入つたわよ? ……それにしてもキツキツねえ』

『ひやつ、まだ触っちゃ駄目つ……』

……一体中で何が起つってるのだろうか?

隣にいる舞を見てみる。予想通り顔が真っ赤になつていて。たぶん私も同じようになつている筈だ。

ちなみに優は居間で子供向けのアニメを見ていてこにはいない。……よかつた。本当によかつた。教育上、これはよろしくない。かちやつ

「さてと……。あら? 一人ともどうしたの?」

不意にドアが開き、中からお母さんが出てきた。なんだかお母さんも顔が赤いような気がする。

「お、お母さん……。何をしてたの?」

「んー、見て貰つた方が早いかしら?」

「……いいの?」

「うん? いいわよ? むしろ、あなたたちも見ててくれた方が好都合ね

……まさかのGOサイン。それならば、行くしかないも。すーはー、すーはー。よしつ、行こうーー！

こわい、東の（部屋の方角的に）Hトーンーー！

「……普通？」

「……うん、普通だね」

冷静に考えてみればありえない」とだつてわかるのにね。

「「……はあ」「

……軽く自己嫌悪。

「あれ？ 姉さんと舞。一人ともビリしたの？」

「な、なんでもないんだよー？」

「そ、そうだよヒロ兄。なんでもないからねー」

「そう？ それならいいけど……」

そこにいたのは、制服に身を包んだ千広。今までに何度も見てきた、黒い学生服姿。

……ちよつと息が荒いのが気になるけど。

「どうかしら？ 上手に出来たと思わない？」

そう言つお母さんは満足気だ。だけど

「う、うん。でもこれ、いつものヒロ兄と同じだよね？」

舞の言つ通り、千広は普段と変わらない格好をしてるのだ。さほど驚きはない。

……まあ、相変わらず可愛らしいんだけどね？

「えつと、母さんにも相談したんだけど、とりあえず今日までは男のままいた方がいいかなって……。幸い今日は土曜日だから学校が終わるのも早いし

「だから学生服に着替えたんだけど……」

「「だけど？」「

どうしたのだろう? 千広もお母さんも、なんとも微妙な表情を浮かべているのが気になる。

「実は、思つてた以上に胸が大きくて、そのままじゃシャツと制服が着れなかつたのよ……」

「…………」

「ふう、とお母さん。

「それでね、形が崩れたら大変だからあまりやりたくなかったんだけど、そのままつてわけにもいかないでしょ? だから、胸に包帯を巻いてきつく締め付けて、無理矢理抑え込んでから着せたの」「ああ、なるほど。つまりわたくし千広があげてた声はそれが原因だったのか。

ホツとしたような残念なよつな。

……うん、實に残念。

「それじゃあ、かなり苦しいんじやない? 千広、大丈夫?」

「大丈夫だよ、姉さん。ありがとう。でも、やっぱり長時間身に付けておくのはきついかも……」

「そうね、母さんの見た感じでも、結構大きかつたものね……。たぶん舞よりは確実に大きいと

ガタンッ

それは突然のこと。音が鳴つた方を向くと、本棚に寄りかかるようにしてなんとか立てていいといつた様子の舞。

「ま、舞。大丈夫?」

千広が心配そうに舞に声をかける。自分の苦しさなど忘れたように。

でも……、届かない。

「ヒ」

「ヒ?」

「ヒロ兄の裏切りものおおおおおおおおおおつーーー」

そう言い残し、部屋から駆け出る舞と

「ちよ、ちよっと待つてよ！？」ねえ、舞つー？』

座っていたベッドから急いで立ち上がり、追い掛けの千広。

「あらあら、家の中を走り回ると危ないわよ

続いてお母さんも部屋を後にする。

そして、ひとり取り残された私。

「…………」

『ノンノン

『ねえ、舞つ。お願ひだから部屋から出でなきよ。舞はまだ中学生だから、これから成長期が来るつて……』

『うわーーーん。ヒロ兄の馬鹿あああつーーー。』

『舞？ お兄ちゃんに馬鹿とか言ひやが田口へ。』

「…………」やうやう場のないムリムリ感は、どうせやつて発散すればいいの？

…………本音に近づく？

「それじゃあ行つて、うつしちゃ。気を付けてね  
「うん、行つてきます」

「……行つてきます」

とりあえず、私と千広は学校に行くことにした。

『舞のことは、母さんがなんとかしておくれ』とのことなので、そちらの件はお母さんに任せ。ちなみに優は、今日はお友達が呼びに来てくれて少し前に家を出ているらしい。なので今は、私と千広の二人だけ……。

いつもなら舞と優の一人とも途中まで一緒にで、家から千広と二人きりというのは新鮮だ。

一人には悪いけど千広を独占出来てよかつたかなとも思つ。

……そうだ。せっかく二人きりなんだから

「ねえ、千広。今日は手を繋いでいいか？」

「えつ？ うん、別にいいけど……」

ちょっとだけ、雰囲気に浸つてもいいよね？

「千広の手つてすべすべしてて気持ちがいいね」

「あ、ありがとう。でも、なんだか恥ずかしいんだけど……」

「ふふ」

繋がる、私の右手と千広の左手。柔らかくて温かい千広の手。

その手を離さないようになつかり握りながら、私は心の中でひとつだけお願ひ事をする。

「これからもずっと、千広と一緒にいられますように。」

叶うと、いいな……。

「……ねえ、姉さん。そろそろ手を離してくれないかな?」

「んー、もうちょっとだけ……」

「いや、もう学校に着いたし……。ボクの教室はこっちで、姉さんの教室はあっちでしょ? それにそろそろチャイムが

キンーンカーンカーン

「…………遅刻だ」

千広が女の子になつて、初めての登校日。私と千広は一緒に仲良く遅刻をした。

「いつものこと、今日はサボって遊びに行つちゃおつか?」

「……行かない

「えー」

## 第四話 着て、見て、触つて

「 それじゃあ今日はここまで。田直、挨拶を頼む。」

「きりーつ、気をつけー、礼」

「 「 「 ありがとうございましたー」」

三限目の授業の終わりを告げる声。土曜日の中は午前中のみの時間割となつていて、後は帰りのバスとその後の掃除が終わり次第解散となる。

……はやく先生来ないかな？

黒板よりも上に掛けられた、電波式のアナログ時計を見やる。その秒針は時を一秒一秒正確に、そして確実に刻んでいく。それに間違いなどないのだろう。

それでも、何故だか今日はそれがとても遅く感じられる。

いや、何故もない。理由はわかっているのだから。だって私は……。

「おーい、深雪つてばー。聞こえてないのかー？」

「……えつ？」

不意に聞こえた、私を呼ぶ声。その話ぶりから察するに、さつきから幾度となく呼んでいたのだろう。

「「めん、ちょっと考え事して……。それで、何かあったの？」

その声の主、小森春香に言葉を返す。

「いや、なんだか深雪の様子が朝から変だったからね。ちょっと氣になつて」

「深雪ちゃん、授業中もずっとわの空だつたし、何かあつたのかなつて話してたの」

春香のそれに、一緒に来ていた白石理奈が続けて言ひ。

やつぱりこの一人には気付かれてたか……。

「まあ、大体予想はつくんだけどなー」

「たぶんだけど……。深雪ちゃんの弟の、千広君のことでしょう?」

「今までにも何度もあつたからねー。十中八九間違いないでしょ」

「…………」

なんだか馬鹿にされてるような気がする。でも、正解。悔しくても言い返せないのが情けない。なんとなく切ないなあ……。

「おっ? その反応を見るに、正解っぽいねー。ま、小学校からの幼馴染みに隠し事は出来ないってことで」

「……はあ、参りました。降参降参」

幼馴染み、侮り難し。

でも、私も二人のことは良く知つてるから結局はおあいこかもしない。本人は気付いてないと思われるクセや好みの異性のタイプなんかもわかつていい。

千広のことならもうと詳しいんだけどね……。ふふつ。

「でも、深雪ちゃん。私たちで力になれることがあつたら協力するよ?」

「ありがとう。でも、もつちよつと自分で考えてみるから。それでまだ駄目だつた時はお願ひするね」

「ああ、何でも相談してくれていいいぞ? あたしなら」

「ああ、持つべきものは優しい友達。」

「駅前のクレープハウスのクレープ三つで手を打つてあげるぞ」

「…………」

その時は、ゴーヤとハバネロとショールストレミングのクレープを奢つてあげるとしよう。うん、それがいい。そうしよう。

がらり

「おーい、HR始めるぞー。みんな席に着けー」

ドアが開く音。それに一瞬遅れて先生の声が教室内に響いた。

「おつと、先生がきた。じゃな、深雪」

「またね、深雪ちゃん」

「うん、また」

自分の席に戻る一人を私は田で見送る。その後、喧騒が落ち着くまで少しの時間を要してから帰りのHRが始まった。

……はやく千広に会いたいな。

「ほら、着いたよ千広」

HRと掃除を終えて、私はすぐに千広の教室に向かった。千広の方も丁度終わつたらしくて、いいタイミングだつたと思つ。ちなみに、そつと教室内をうかがつてみたけれど、いつも訪れる時と特に変わつた様子はなかつた。今日のところは大丈夫だつたのだろう。

そして、学校からの家に帰る前、私と千広はあるものを買いに街にやつてきていた。

「……は……？」

「女性用の下着の専門店。千広、女の子になつたんだから当然女子用の下着がいるでしょ?」

「あ、そうか……。でも、ボク学生服だし、入れないと思つんだけど……」

「大丈夫大丈夫。最近はカップルの男女が一緒に買いにきたりまするつて雑誌に書いてあつたもの。だから、きっと平気よ」

「……知らなかつた」

うん、まあ嘘なんだけどね? でも、少しでも千広が落ち着けたようでよかつた。

「ほら、早く行こ? 時間なくなっちゃう」

「わ、待つて、姉さん」

私は千広の手を取り、お店の中に入つていいく。  
ちなみに、ブラも買う必要があるので、結局は脱いで計つてもらわないといけないと気が付いたのは入つてすぐのこと。

「えーと、トップが八十四センチの……。Cカップになりますね。そのサイズでしたらこちらです」  
「……ありがとうございます」  
計測を終えた千広と店内を見てまわる。と、可愛いもの、セクシーなもの、様々な下着が綺麗に並べられていた。  
「ねえ、アレ可愛いと思わない?」  
「えつ、ちょっと派手だと思つけど……」  
「そう? 似合つと思うんだけどなあ……。つて、あら? もう選んできたの?」

ふと、千広の持つていたかごを見ると、すでにいくつかの下着が入れられていた。だが

「うん、こんなものかな? つて思つたから」

「うーん、いくらなんでもこれは……」  
あまり可愛くない。

見た感じでは、どれも飾り氣のないシンプルなデザインものばかり。色も一色ものしかない。

「駄目かな？ 一応生徒手帳に書かれてるよ！」、シンプルなものを選んだつもりなんだけど……

……ああ、なるほど。それでなのか。

しかもこれは、男の子に多い『着れればいい』の買い物方。どうで選ぶのが早いわけだ。

「もう少し可愛いのにしあしょい？」

「えっ？ でも……」

「そこまでしっかりと学生規約を守ってる子なんていないよ？ それに、同じようなばかり着ても面白くないと思わない？」

……主に、見る私が。

「だから、やつは戻してきて、今度はお姉ちゃんと一緒に選ぼう？」

「うん、わかった。でも、そっちの商品は少し高いね……。ボク、今日はあまりお金を持ってきてないから少ししか買えないかな」「心配しないで。お母さんからお金を預かって来てるから」そう言ってお財布からお金を取り出してみせる。

「お父さんの今月分のおこづかいから……ね？」

「……あれ、本気だつたんだ」

ちょっとびりあきれ顔の千広（でも、そんな顔も可愛らしげ）と、再び店内を巡る。買い物を終えて外に出た時には、もう夕焼け空に

なっていた。

「ただいま。千広？ いるかい？」

「あ、父さん。おかえりなさい。どうしたの？」

普段はみんな揃って食べる夕食。だけど今日はお父さんの帰りが遅いので、他のみんなは先に夕食をとっていた。そして、みんなが食べ終わった頃によつやくお父さんが帰ってきた。

……やけにテンションが高いのが気になるが。

「千広にプレゼントを買つてきたんだ。ほら、開けてじりじり？」

そう言つて、お父さんは千広に一寧に包装された袋を渡す。

その中から取り出されたものは

「あ、これって……」

色とりどりの、下着の二。中には水玉や縞模様といった柄ものもある。

「千広、女の子になつちやつたろう？ だから、必要じゃないかと思つてね」

なんか、おかしくない？ いや、間違つてはないけど、なんだろう。このモヤモヤした感じ……。

「ありがとう。お父さん。すいへん嬉しい

そしてなんの疑念も持たない、純粹な千広。そんな千広の様子を見てしまつては、言つて言えない。

……あれ？ でも、ちょっと待つて？

「ねえ、お父さん。サイズはどしきたの？ 適当に買ったの？ とりあえずその件はおいといて、もうひとつ気になつたことを聞いてみる。

「ああ、朝触った感じで、だいたいわかつてたからね。八十四センチのじカップ前後だと思つて、それくらいを買つてきたよ」

……あの時か。

あのシリアスな場面で、せりげなく確認……。ある意味尊敬すべきかもしれない。

「腰とかおしりは見た感じで判断したから、パンツの方はちょっと誤差があるかもしないね。だからお風呂から上がつたら履いて見せ。痛つ、ま、待つた母さん。僕はまだ、千広と話を」「私がじつくり聞いてあげるから。だからじつに……ね。あ・な・た？」

するやうと引きずられてこへお父さん。それを見て少しだけすつとじた。

……でも、まだまだ甘いと思つ。

まだ数枚の紙幣が入つたお財布。実は、お父さんの来用分のおじづかい分まで入つてゐる。わざわざまではさがにと思つていたけど

……。もつ、いいや。

明日は、千広の服を買いに行こうかな？

きつと楽しい一日になる。不思議とやつ思ふた。

## 第五話 弟姫

夕食を終えて洗いものを済ませた後、私たちは千広の部屋に集まつていた。理由としては、千広のブラを着ける練習のため。

「えっと、あれ？ はまらない……。どこにあるのかな？」

「ヒロ兄。ほら、ここだよ！」

「あっ、あつた。ありがとう、舞」

「どういたしまして」

舞が千広の手をひとつ導く。すると、よひやくホックが引っ掛けた。

「やつぱり、何も見ないで着けるのは難しいね」

「慣れればなんてことないんだけどね。でも、出来ないと困る」ともあるから頑張って、千広

先程まではクローゼットの鏡を見ながら練習をしていて、その状態でならほぼ問題ないくらいには上達している。だが、鏡を使わずにになると、まだまだ苦戦するよしだ。

ところで今、千広は一回毎に他のものと交換しながら何度もブラの装着の練習を繰り返していた。当然それには理由がある。ひとつは様々な形状のホックに慣れるため。つまり純粋な練習としてだ。

そして、もうひとつは千広の好む材質のものを知るため。

ブラは直接肌に触れさせて身に付けるものなので、肌触りが良いものの方がストレスも少なくなる。

そう言つた理由から交換しながらの練習を選めた私（と舞）は

「ほり、ヒロ兄。次はこれを試してみよ？」

「待つて、舞。それよりもこっちの方が千広に似合つと思わない？」

「……えつと」

千広のプチファッショニシヨーを楽しんでいた。

……眼福眼福。

## パンパン

『千広？ いる？』

しばらぐそんなことを続けていると、不意にドアを叩く音とお母さんの声が聞こえてきた。着替える手を止め、千広がドアを開ける。「何？ 母さん」

「お風呂沸いてるから、先に入ってきたなさい？」

「うん、ありがとう。でも、姉さんや舞や母さんみたいな女の子が先に入つた方がいいんじゃない？」

「うふふ、それを言つたら、千広も女の子よ？ それに、深雪と舞にはちょっとお話があるから。……ねつ？」

「わかった。それなら、先に入るね？」

「ええ、行つてらっしゃい。あ、そのままの格好で行つちや黙目よ？」

そういうお母さんと言われた千広は、上にシャツを着て部屋を後にした。そして、部屋に残っているのは私と舞と、ニコニコと笑顔を浮かべているお母さん。たぶん、千広に女の子と言わされたことが嬉しかったんだと思つ。

……いえいえ、いい歳してとか全然考えたりしてませんよー、お母様。だから、その全く笑つてない目でこいつを見ないでくださいませ。

「それで、話つて？ やつぱつヒロ兄の」とへ。

「……ええ、そうよ」

なんとなく予想はできていた。やつせのやりとりも、当人である千広に聞かれないよう配慮してのことだらう。ちなみに、先程のピンチは乗りきれた……と、思う。というか、乗りきれたと思っていた。

「正直なところ、あの子は今とても不安定だとと思うの……。男の子でも、女の子でもない状態。あなたたちも今日一日を一緒に過ごして、何か思うところはなかつたかしら？」

「……うん」

確かに、それはあつた。私たちの“普通”といつ枠の中で考えれば、程度の差はあれど違和感を感じる光景。

例えば、平氣でお父さんと一緒に風呂に入ろうとしたこと。女の子なら普通は一緒に入るうとはしない。

例えば、女性ものの下着に抵抗感を持たず、平然と着てみせたこと。男の子なら普通は嫌がつてみせる筈の」と。

さつきのブラ装着の練習の時もそうだった。

ひとりでブラを着けるよう、何度も何度も繰り返しあつていた。それは女の子としてなら普通だ。

その一方で、特に恥ずかしがることもなく（いくら私と舞が家族であり、女の子であつたとしても）、上半身の一糸纏わぬ姿を他人にみせている。これはきっと男の子の一面。

そう話をしてもみると、お母さんは「やつぱつね……」と言葉を漏らし、小さく溜め息を吐いた。

「これはあくまでお母さんの想像で、実際には違つて居る可能性も高いけど……。千広は自分がわからなくなつてるんだと思つの」

「…………えつ？」

「今まで男の子として生きてきたのに、急に女の子になつてしまつた。だから、確固たる自分とこゝもの無くしてすりと歯んでる。……故に、人に流されやすい」

お母さんが話してくれたこと。

田ぐ、千広は身体の変化に心があいてけぼりにされた状態で、自分でどうすればいいかわからなくなつていてる。だから、無意識に他人を支えにしてしまい、身を委ねてしまつて居るらしい。

考えてみれば今日一日、千広が断つたことはない。いや、一度だけ「学校をサボっちゃおつか？」と聞いた時は反対したけど、あれも私がもっと強く言つていたら渋々ながらも了承したかもしれない。

お母さんの話を聞き終わつた後、舞がゆつくつと口を開いた。

「…………それで、あたしやコキ姉はどうすればいいのかな？」

私も同じことを考えていた。私たちに何ができるのか。何をしてあげればいいのか……。

「それは

『いつも通りに接してあげればいいのさ』

「えつ！？」

ドアの向こうから声が割り込んできた。こきなりの乱入に戸惑いつつ、ドアを開けてみると

「やあ、話は聞かせてもらつてたよ？」

そこにはお父さんだった。何故か、布団でグルグル巻きにされている状態だが……。

「あら？ 部屋に閉じ込めておいたのに……」

「うん、なかなか脱出には苦労したよ」

そう言って微笑んでみせるお父さん。なんだかう、すく跳りた

くなってきた……。

「というか、お父さんの部屋は一階で二階せ一階。ところがひとせ、あの階段（割と急）をそのイモムシの様な格好のまま登ってきたのだろうか？…………よく登れたものだと思つ。

「一回程途中で滑つて落ちてしまつたけど、まあ問題ないよ」  
しかも考へてゐること読まれた！？

「それはいいけれど、説明してあげてくれる？ 私と同じ考え方だと思つから」

「おつと、やうだね」

今までとは違ひ、真面目な顔で話し始めるお父さん。……イモムシだけビ。

「朝も言つたことなんだけど、僕は千広が男の子でも女の子でもいいと思つてる。ただ、千広が千広でいてくれればね…………」

だから……。と、お父さんは続ける。

「千広が今までと同じでいられる様に、千広を千広そのままに受け止めてあげてほしいんだ。最も、身体が女の子である以上少し変わつてしまつのは仕方ないけどね」

やつぱりお父さんはすごいと思つ。こんな時にでも取り乱さず、どうすれば良いかを冷静に考へてる。ただ

「ということは、これをほどこてくれないかな？ 今ならまだ千広はお風呂にいる筈なんだ」

「これさえなければいいのに……。

「…………あなた？ 仮の顔も三度までつて言葉。知つてる？」

「ちょっと待つた、まだ三度だからセーフじゃないかい！？」

「銀行の預金残高

「…………」

「ああ、お父さんが買つてきたたくさんの下着のお金つてそこから出でたのか……。

トイツ

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオ—！」

ドサツ

ピシヤツ

「さてと……」

お父さんを窓から外に捨てて、何事もなかつたように話し始める  
お母さん。ちょっと怖い。

「まあ、そういうわけなんだけど……。ただ、せつかも言つたよう  
に、今の千広はとても危ない状態。純真無垢なお姫様みたいなもの  
かしらね？」

「……お姫様」

「だからね？ そんな千広に近付いてかどわかすクソ虫共は徹底的  
に排除すること。……いいわね？」

「「ラ、ラジヤー」」

本能が警告する。「この人（お母さん）には逆らつなど……。  
でも

お姫様。

千広はお姫様。お姫様な私の弟。

その単語を思い浮かべる度に、不思議と胸が熱くなつていぐ。

私の、おじいちゃん  
弟姫おじいちゃん……

「お風呂、上がったよ? .....あれ? どうしたの?」

お風呂から上がって、戻ってきた千広。頬がほんのりと赤みがか  
つていてる。

「ううん、なんでもないよ。ただ、千広のこと大好きだよって話し  
てただけ」

「えつ.....。あ、ありがとう。ボクもみんなのこと、大好きだよ  
さつきよりも少し赤みが増した気がする。照れているのかな?  
とても可愛らしいね.....。」

可愛い可愛いお姫様。私があなたをお守りします。だから

ずっと、私と一緒にいてくれませんか?

## 第五話 弟姫（後書き）

こんにちは、赤井 鈴です。

今回はなんだかコメティイーよりもシリアルスが強く出ててしまつていて  
気がします。一応、お父さんで中和したつもりではいるのですが、  
いかがでしょうか？

次からはまたコメティイー色の強めな話を書けると思いますので、そ  
ちらの方が好みの方があられましたら、今しばらくお待ち下さいま  
せ m (—) m

## 第六話 男の子と女の子

千広が女の子になつて一日目。今日は隣街まで千広の新しい制服を取りに行くことになっている。

実は、昨日私たちが帰つてすぐにお母さんが千広の身体を計つて、電話で注文をしていたのだ。

電話口でお母さんが「明日の昼までに間に合わなかつたら、おたくの 」とか言つてたのが聞こえてたけど……。

うん。怖いからもう考えないよ」とひみじにひみじに。

「姉さん、お待たせ」

着替えた千広が一階から降りてきた。私の春物のワンピースを貸してあげたのだけど、とてもよく似合つている。

「お待たせ」

そして、我が家の中の子の優も一緒にやつってきた。今日はこの三人で出かけるのだ。

ちなみに、舞は所属している水泳部の練習で学校に行つてゐるので今回はない。

「それじゃお母さん、行つてきます」

「はーい。みんな、気を付けてね?」

「うん、行つてくるね」

「行つてきます」

そうお母さんと言葉を交した後、私たちは家を出発した。目指すは、電車に乗る最寄り駅。

「そ、ういえば昨日の、確か……岡崎さんだつたかな? そつちはいいの?」

昨日、優にかかつってきた電話のことを一応聞いておく。声の大きい子で、じぢらまで話の内容が聞こえてきたのだが、『明日のティー

ト、楽しみにしてる』と言っていた筈だ。が

「……向こうが勝手に言つてゐるだけ。それに、断わらつたもその前に切られたから」

まあ、予想通りの回答だつた。だつて、いつものことだから。自分で言つのもなんだけど、私を含め兄弟みんな結構もてる。私自身、告白も何度かされた。全部断わつてゐるけど……。

でも、その中でも特にモテるのが優。この子だけは本当にす『』。去年のバレンタイン(ティーなんかチョコレートを七十個近くも貰つてきた。

……本当にキミは、小学一年生(当時)だったんだよね?

みんなで頑張つて食べて、体重が一キロ増えたこと(今はもう戻したけど)。千広と優が、一人で涙を浮かべながら夜遅くまでお返しを作つていたこと。

……あの出来事を、私は生涯忘れないだろう。

その後、私たちは取り留めのない話をしながら歩き、一十 分程かかるつて駅に到着した。

「いらっしゃいませー。お客様、何名様でいらっしゃいますか?」

隣街に着いた後、私たちはさっそく制服取り扱い店を訪れた。

無事、千広の制服を受け取ることができよかつたと思う。……

本当によかつた。

そして、その帰り。お昼時とあつて少し腹が空いてきたので、

「Jのニアミワーレストランでお皿を取ることにしたのだ。

「J注文がお決まりになられましたら、そちらのベルでお呼びください」

私たちを席に案内し、マニコアル通りのセリフを残して、店員さんは去つていく。

「私はクリームパスタにしようかな？」

「僕はチキンドリアで」

お子様ランチじゃないのか。

「……深雪姉ちゃん、ガキ扱いはやめて」

「あ、ごめん」

……なんだか最近ずっとと考えてることを読まれてる気がする。そんなにわかりやすいのかな？

「うーん……」

一方、千広はまだメニュー表を見て頭を悩ませている。いつもはすぐに決める方なのに……。やっぱり女の子化が関係しているのかもしれない。

「ねえ、兄ちゃん

「えっ？」

「兄ちゃんが食べたいものでいいんだよ？ 昨日も言つたよね？」

千広兄ちゃんがいって……

「あつ……。うん、そうだね。ありがと、優。それじゃあ呼ぶね

？」

ん？ イマイチよくわからない。食べたいものを選ぶのは普通のことじやないのかな？ というか、昨日つて？

「ねえ、ゆ

「お待たせしました。J注文をどうぞ」

……遮られた。

「Jのクリームパスタと、チキンドリアと

「以上ですね？ お冷やは前の方にありますので、J皿由りお

取りください」

千広が注文を伝え、店員さんがそれに答える。その後、千広は「お冷や取つてくるね」と席を外した。

……今度これ。

「ねえ、優？ セツナのつてびつこいつ意味？」

「ん？ そのまんまの意味だよ？」「…

それがわからないんだけど……。

「もう少し詳しく説明できない？」

「えつと、つまり兄ちゃんは、男の子ならとか女の子ならとか考へて選んでたんだよ。だから、そんなの関係なく、兄ちゃんの好きなのを頼めばいいって」

それで……か。

「昨日つていのは？」

「昨日、一緒にお風呂に入つていてる時に、兄ちゃんに『優（僕）から見て、ボク（兄ちゃん）は男の子と女の子のびつがだと思つ?』って聞かれたんだ」

一緒にお風呂？ なんという抜け駆け。正直甘く見ていた。

……でも今は先の話を聞いて。お風呂の件は家でじっくり聞いて貰う。

「……優はなんて答えたの？」

「わからないって答えた。でも

「でも？」

「男の子でも女の子でも、中身が千広兄ちゃんならびつがでもいいと思つて言つたよ」

「……そつか

「……じもじらしい素直な答えた。でも、おそらく千広が一番欲しかったと思われる答えたと思われる答えた。

その答えを自然に導き出した優に、私は少しだけ嫉妬した……。

「兄ちゃん……」

「千広、これ……」

三つのお冷やを持って戻ってきた千広を交え、しばらく談笑していた時のこと。私たちのテーブルに運ばれてきたのはクリームパスタとチキンドリアと

「スーパー・デラックス・パフェ。重さ一キロだって」

巨大な器に盛られたクリームの山。山。山。加えて、綺麗に切り揃えられたフルーツが大量に乗り、チョコソースもたっぷりかけられている。

見ているだけでお腹が膨ってきた気がする。

「男の時はちょっと恥ずかしかったから……。それに、ひとつ試したいことがあつたしね。それじゃあ食べようっ！」

「うん……」

「そう……だね」

「いただきます」

そう言つて幸せそうにパフェを食べる千広と

「……いただきまーす」

細々と食べる私たちは対称的だつたことだらう。

二十分後

「うう……、もう食べれない……」

四分の三程食べたものの、途中で限界を迎えた千広。いや、それ

でもよく頑張ったと思うけど……。

残つてしまつた分は私と優で少しづつ減らしていく、なんとか食べ終えた。

「でも、ひとつわかつたよ。女の子の身体になつてもボクはボクなんだね。普通サイズ一杯分くらい食べたり、気持ち悪くなつてきた

……」

「「」

……いや、女の子ならみんな甘いもの好きだつたり、いくらいでも食べれたりつてことはないからね?

でも、苦しそうでありながらも、なんだか満足そうな千広を見ていふといふ、間違つてると言えなくなつてしまふ私は駄目な姉なのだろうか? ……あつと違ひ筈だ。

## 第七話 決戦前夜

「 羊が三千一百四十一匹。羊が三千一百四十二匹。……」

私は今、眠れない夜を過いでいる。理由は、横で寝ている千広が気になつて。当人はすーすーと規則正しい寝息をたてて、気持ちよさそうに眠つている。その寝顔はまるで天使のよつだ。

……まあ、実物は見たことないんだけどね。

それに、仮に本当に天使いたとしても千広の方が可愛いのではないか？ と思う。我ながら少々姉バカかもしない。

「 羊が三千一百四十四匹。羊が三千一百四十五匹。」

もちろん、こんな状況になつたのにはわけがある。それは、今日のことと明日のこと……。

ファミレスから出た私たちはそのまま街へと繰り出し、色々な場所を見て回つた。ファンシーショップで小物を見たり、ペットショップで動物と触れ合つたり……。ゲームセンターに寄つて、プリクラを撮つたりした。

優にお願いして一枚だけ千広とのシーショットを撮らせてもらつたりもした。「貸しひとつだよ?」と楽しげに言つていたのが妙に気になるけど……。

まあ、それは置いておくとして楽しい時間を過いでいたのだ。

……最初のうちは。

少しずつ時間が過ぎてゆくつれ、千広の笑顔も失われていった。昨日と同じように夕日で空がオレンジ色に染まり出した頃。その時にはもう自分から話しかけることもなくなっていた。

家に帰り着いてからもそれは同じ……。いや、やけに悪化している状態。

お父さん、お母さん、舞、優、スズ。そして……私。誰にもどうするにも出来ないまま、今日が終わりを迎えていく。そんな一日だった。

「千広？ まだ起きてる？」

まもなく夜の十一時にならうといつた時間帯。私は千広の「じ」が気になつて部屋を訪れた。お父さんからは「少しひとりで考える時間あげよう」と言われていたけれど……。

「姉さん？ ……」「ん、まだ起きてるよ」

声が返ってきた。千広は……いや、千広に限らず私の家族はみんな夜の十時半には就寝するので珍しいことだと感づいた。でも、今日だけはきっと起きと起きてると感えた。

「入るね？」

そつとドアに手をかけ、ゆっくりと開ける。一応、他のみんなにも配慮。

「どうしたの？ こんな夜中に珍しいね？」

「ちよっと……ね。千広、今日は少し様子が変だつたから気になつて」

「……」「めぐなさい。心配かけちゃつたね」

少しだけ苦笑いしてみせる千広。でも、その無理矢理感が痛々しい。

「ううう。……ねえ、横に行つてもいい？」

「うん」

千広の部屋にある椅子は勉強机のものだけ。なので、それ以外の時はベッドに座つてとことつががつ。今回もそう。

私はそつと千広の隣に腰かける。

「今考えてるのって、明日のことをしようつ?」

「……わかるの?」

「せつからずつと机の上の紙袋を見てるんだもん。わかつちやつ  
み……」

千広が見てる紙袋。それには私も見覚えがあった。中身は今日

取りに行つたばかりの制服。女の子の着る制服……。

それを着て「こぐ」とは、女の子だと周囲に告げることに餘ならな  
い。

「どうしても考えてしまつんだ……」

そう、ポソリと

「みんながボクをどう思つのかなつて」

千広は言葉を漏らす。

今まで男の子として一緒に過ごしてきた人物が、ある日を境に女  
の子として自分の前に現れる。たぶん、平静でいるのは難しい。  
「だから、明日になるのが怖くて、今も眠れなかつた……」

「……そつだよね」

どんなに望まなくとも、明日は必ずやつてくれるものだから。それ  
が千広を追い詰めていた原因。

それなら、私が千広にしてあげられる」として何があるんだろう?  
千広の不安を取り除いてあげられないのかな?

今私の出来ることば

「姉さん？」

そつと、私と千広の手を重ねる。ほじけないようこ指を絡めて。

「今日は」」で一緒に寝よっ?」

「えっ?」

「ほらほら、布団に入つて。電気消すよ?」

有無を言わさず一緒に布団を被り、電気を消す。急に暗くなつたため、まだ目も慣れておらず何も見えない。

ただ、繋いだ手の温もりが隣に千広がいることを教えてくれていた。

「前はよくこいつやって一緒に寝てたよね……。覚えてる?」

「……うん、覚えてるよ。姉さんもボクも、嫌なことがあつた日はお互いの部屋を訪れてたね」

「雷が鳴っていた日。怖い夢をみた日。友達と喧嘩した日……。他にはどんなことがあつたかな?」

そんな日は決まって一緒だつた。ひとりぼっちじゃないんだつて、幼心なりにわかつてたんだろう。一人だと、不安な気持ちが嘘のように溶けてなくなつてしまつて、安心できた。

いつの頃からかやらなくなつてしまつたけれど……。それでも「……私はいつも千広の味方だよ? 明日も、明後日も、その先もずっと」

この気持ちだけは、今でも変わらない。

「だから、ね? 今日はもう休もう?」

「うん、そうするね。……ありがと、姉さん

よかつた。よひよへ、笑つてくれたね……。

結構日も慣れてきたとはい、闇に包まれた部屋の中はまだまだ暗い。だから、正直なところ千広が本当に笑つてくれたところがは

つきり見えたわけではないんだけれど……。

「お休みなさい、姉さん……」

「うん、お休み……」

でも、私の長年培つてきた姉としての経験と勘が「間違いないよ」と教えてくれている。せつとこれは、私と千広の絆……。

「お姉ちゃん……」

不意に、横で寝ている千広の口から私を呼ぶ声が漏れる。

「どうしたの？ 千広」

やう聞き返してしばらく待つてみると、でも、なかなか反応がない。どうやら寝言だったみたい。

あの後、千広はすぐに眠りこついた。きっと一日中気を張つて消耗してたんだと思つ。…………「めんね、もつと早く気付いてあげれなくて。

でも

「お姉ちゃん……か

久しぶりにそう呼ばれた気がする。

今は私のことを「姉さん」と呼ぶ千広も、小学生の頃は「お姉ちゃん」と呼んでくれていた。

……そつか、千広と一緒に寝なくなつたのもあれからこの時期だつたな。

横で眠る千広をもう一度さつと見やる。あの頃から変わらない、可愛らしき寝顔。

今日は、少しだけお姉ちゃんらしさ」とができたかな？

明日の決戦の舞台をしつかりと見守れるよう、私もそろそろ休む  
としよう。

明日も、明後日も、これからも。千広が笑顔で過ごせると  
……。

お休みなさい、お姫様……。明日は頑張りうね。

そっと、私は目を閉じた……。

……

……

ところで、今何匹まで数えてたつけ？

## 第七話 決戦前夜（後書き）

なんだか前の話からずいぶんと間があいてしまいました……。  
私はどうも登場人物が少ない＆動きが少ない話を書くのは苦手なようです（泣）

ところで、私の予定としては後一話くらいで導入部が終わり、それから日常系のコメディーを書いていく手筈になっています。  
次の話は気分転換もとい現実逃避をして先の話を書いてみたりせずに、早めに書いて載せれるようにしたいと思いますので、また足を運んでいただけたら嬉しいです。

第八話 また一緒に…… 前編（前書き）

今回の話と次の話は前編後編の続きものです。

## 第八話　また一緒に…… 前編

「しつかし、今日はどうなってるんかねー？」

昼休みになり、私と春香、理奈の三人で集まつてお昼をとつていた時のこと。私の向かいに座つた春香がパンをかじりながら話しかけてきた。

「うん、こんなこと初めてだよね？　何があつたのかな？」

理奈は一度箸を休め、春香の言葉に同意する。

「人が……いや、おそらく学校のみんなが思つていいであろう疑問。それはどうして急に午前中の授業が全て白黙になつてしまつたのか……。

「まあ、あたしとしては助かつたけどなー。おかげでぐっすり眠れたよ」

「もう、春香ちやんつたら……。ちやんと白黙しないと駄目だよ」「いや、昨日は夜中の一時までゲームしててさ。眠くて起きてられなかつたんだよね」

そんなことを話してみせる。白黙になつた理由を知らなければ、私もその会話の中に混ざつて「もつと早く寝なさいよ…………」とか言って一緒に笑つたりしていたと思える。けど

「ん？　どうした深雪。なんか顔色が悪いぞ？」

「深雪ちゃん、具合が悪いの？　保健室に行く？」

「ううん、平気。……ありがとう」

それが千広のことだと知つていてる私は、どうしてもそのことが頭から離れず、自ら会話に入らうといつづが起こらない……。

今朝、お母さんは私と千広を学校まで車で送つてくれた後のこと。  
千広は私と別れて一人で職員室に向かつた。

本当は私も一緒に行くつもりだった。でも、千広は「一人で大丈

夫だよ」と笑つてみせた。

無理矢理につくつたものではない、純粋な笑顔。そんな顔をされて、私はそれ以上何も言えなかつた。

ガラツ

「あー、そのまま昼食を続けながらいいから聞いてくれ」

突然、教室のドアが開かれ先生が入ってきた。クラス委員に自習という言付けに加え、朝のHRも任せて緊急の職員会議に出ていたので今日に限つては顔見たのは初めて。

「四限目の時間は臨時の全校集会になつた。なんで、時間になつたら速やかに体育館に集合してくれ。以上だ……」

それだけ伝えて、先生は再び教室を後にした。一瞬静まりかえつた教室は、再び賑わいを取り戻す。

「臨時集会かー。数学が潰れるのはいいけど、ホント何があったのかね？」

「わからないけど、結構重大なことなんだろうね。午前中の授業が全部潰れちゃうくらいだもん」

「まあ、行つてみればわかることか……。深雪、早く食べないと昼休みが終わるぞ?」

「……うん」

運命の時間までは、あと少しだつた……。

体育館に着くと、そこはもう他のクラスの生徒たちで溢れかえっていた。時間もまもなく四限目に入ろうとしているところからして、どうやら私たちは最後の方のようだ。各先生方が生徒たちを指定の場所に並ばせて座らせていく。

「ほら、そろそろ時間だから早く並んで座れ。揃ったところで校長先生の話が始まるからな」

うちのクラスにも同様に指示が出される。でも、早く始まつてほしいと思つ反面、いつまでも始まらないでとも思つ……。どちらがいいのか、私にはわからなかつた。

『じゃあ校長先生、お願ひします』

『ああ……』

数分後によつやく最後のクラスが並び終え座つたのと同時に、壇上に校長先生の姿が現れる。その顔はなんだか疲れているようにも見えた。

『えー、本日皆さんに集まつもらつたのは……』

開口一言田はそんな定型文な挨拶から。それからも特に意味もない煮えきらない言葉が続き、周りはさつそくダレできている。

何をやってるんだこの人は……。

校長先生のはつきりとしない物言いに、苛立ちがつのつてくる。

『なにぶん私にもこのような経験はなく前例としても聞いたことがないことでいかに扱つていいいのかわからない次第なのですが。……とりあえず出てきてもらつていいかな?』

『えつー? まさかここでー?』

猛烈に、嫌な予感がした……。

『ん? おい、あれつて』

『速水……か？ なんで女子の制服着てるんだ？』

『うそ！？ 別人じゃないの！？』

『でも今日あいつ来てなかつたし……』

舞台袖から現れた千広の姿を認め、ざわめく生徒たち。そのうちの一部、おそらく千広のクラスメイトたちと思われる集団から聞こえてくるのは取り分け大きな動搖の声。

『実はここにいる速水君ですが、なぜか急に身体が女性化してしまつたという話であります』

なつ！？

一部だつたざわめきが、体育館全体に飛び火する。先生たちが必死で対応するが静まる気配はない。

『うそだろ……？』

『女性化ってどういふことだ！？ 女装とか、元々女だつたとかじやなくて！？』

『あの胸とかも本物つてことなの？』

『パンツは？ ……くそつ、見えねえ』

あのハゲエヒヒ……。

今は最悪のタイミングではないか。これでは千広が晒しものだ。数百もの好奇の視線に晒されている千広。きっと辛い思いをしている筈だ。

できることなら隣にいてあげたい。側に立つて、守つてあげたい。

……あれ？

でも、それなら何で私はまだここにいるの？

どうして千広の隣に立っていないの？

どうして周りの視線を遮つて千広を守つてあげられないの？

どうしてあのか細い身体を抱き締めてあげられないの？

ねえ、どうして……？

「おい、深雪！！」

「深雪ちゃん！？」

私を呼ぶ、幼馴染みたちの声。その声を振り切り、私は走り出す。

壇上にいる千広の元を目指して。

途中、私を止めようとした先生もいたけどそれもかわして走り続ける。そして

「姉さん……？」

壇上に駆け上がった私。驚いたような顔でこちらを見ている千広。よつやく辿り着いた。

壇上から今まで私がいた下の方を見ると、こちらを見ている生徒たちと目があう。正直、あまり気分のいいものじゃない。

だから、早く終わらせよう。早く終わらせて、千広をこの場所から連れだしてあげよう。

そう思つて、私はマイクの前に立つ

「待つて、姉さん  
箸だった。

私を止めたのは、今まさに私が守らうとしていた人物。私の大切

な弟の、千広……。

「お願い、姉さん。ボクにやらせて?」

「えつー?」

私の驚きをよそに、千広は続けた。

「正直、このまま姉さんに任せてしまいたいって気持ちもあるよ。でも」

一度言葉を区切って、再び生徒たちの方を見て千広は  
「みんなにボクの気持ちを伝えたい。そのためには、ボクが自分で  
やらないと駄目だと思うから……」

先程、下から見えた不安を無理矢理抑えているかのような様子は  
私の見間違いだったのだろうか?

さつきは、このままでは千広が傷付いてしまうかもしないと…  
…。だから、代わってあげたいと思った。でも

今私の目に映る人物。それは、目に強い意思を宿した、ひとり  
の勇敢な少女だった。

「だから、ね? 姉さんにはそこで見ていてほしいんだ……」

「大丈夫だよ」とでも言っているかのように、私にそっと笑いか  
ける。とても綺麗な笑顔。私の大好きな千広の笑顔。

「うん」

……ずるいな。そんな顔でお願いされたら、断れないよ。

「ありがとうございます。姉さん」

「うん。行つてらっしゃい」

自然と口も動いてしまう。いつになつても千広には勝てないみた  
い。……ちょっと悔しいな。

でも

「…………あれ? どうしたんだらう。涙が出て……!?」

今の勝負だけは負けてはいけなかつた。何故か、そんな気がした

。

## 第九話 また一緒に…… 後編

『こんなにちは』

千広の、たつたその一言。それだけで今まで喧騒に包まれていた体育館という場所は、まるで外部と隔離されたかのように音を失った。

『先程、校長先生から紹介がありました、速水千広です』

千広の澄みきつた声が体育館に響きわたる。

誰ひとり声を出さない。いや、出すことが出来ないのかもしれない。

『実はボク自身、どうしてこんなことになってしまったのかさっぱりわかりません。この前の、土曜日の朝。目が覚めたらもうこの身体になつていて……。まだ夢でも見てるのかな？ なんて』

みんな、千広の姿に目を奪われ、千広の声に耳を奪われる……。

『結局のところ、夢なんかじゃなくて現実だったみたいなのですが

……』

そう、その光景はまるで

『それでも優しい家族に支えられて、手探りではありながらもなんとかやれているといった感じです』

お姫様の舞台……。

『……とにかく、町さんほこの学校のことはどう思っていますか？』

空気がほんの少しだけ変わった……。千広が本当に伝えたいこと。それはきっとここから……。

『まだ入学して一月も経つていませんが、それでもボクはこの学校が好きです……。友達になれたクラスメイトのみんな、厳しくも本当は生徒思いの先生方』

飾り気のない言葉。でも、千広の素直な気持ち。

『 そして、大好きな姉さんのいるこの学校が……好きです  
だから、こんなにも心に響いてくるんだと思う……。』

『だから』

一度言葉を切つて会場全体に目を向ける千広。一人ひとりと向き合つかのように。そして

『もう一度この場所で、ボクと一緒に過ごしてくれませんか……？』

とても小さな願いを言葉に乗せて飛ばした。

静寂に包まれた体育館。五秒、十秒、二十秒、三十秒……。完全な沈黙が場を支配していた。

パチ……パチ……

そんな折りに、その場を切り裂く小さな音。この広い体育館の、たつた一ヶ所からだけ聞こえてくる本当に小さな音。

春香……。理奈……。

私の幼馴染みで、親友の一人。理奈は優しい表情を浮かべて、春香はやれやれとちょっぴり苦笑気味に手を叩いてくれている。

ん？ ……あー。

不意に目があつた春香から「何で黙つてた？」といつた感じの目線が飛んできた。これは後が大変かもしねー。

パチ……パチ……

別の場所からも手を叩く音が聞こえ始める。

何人かは見覚えがあった。千広のクラスメイトの子たち。

パチパチ……パチパチ……

手を叩く人の数が増えていくにつれ、音は段々と大きくなる。やがて

パチパチパチパチパチパチ

この体育館にいる全員が手を叩いて、千広に拍手を送ってくれるようになっていた。それはつまり、みんなが千広を受け入れてくれたということ……。

『速水――！』

『俺も好きだあ――！』

『千広くーん！』

『結婚してくれ――！』

みんなの気持ちが私の方まで伝わってくる。

『ありがとう……ござります』

千広も言葉を返す。本当に、嬉しそう……。

よかつた。本当によかつた……。千広がみんなに受け入れてもらえて。

……よかつた、筈なのに

「姉さん、どうしたの？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫……だよ」

「どうして私はこんなに悲しい気持ちになってしまったんだ？」  
「どうしてこんなに心が痛いのだ？」

「校長先生、後はお願ひします。……ほら、姉さん。行こう？」

涙が、止まらない。

「……落ち着いた？」

「……うん。ごめんね、千広」

「」は体育館にある控室。そして、ここにいるのは私と千広の二人だけ。

その後、私は千広に抱きついて泣き続けた。そして、そうしていつもにやっとわかった。どうして素直に喜ぶことが出来なかつたのか……。

私の手の届かない遠いところへ、千広が行つてしまつたような。  
そんな気がしたから……。

今日一日の千広の様子を思い返す。

「一人で大丈夫だよ」

「ボクにやらせて？」

「そこで見ていてほしいんだ」

「行つてきます。姉さん」

私に頼ることなく、自分でやるという意思が込められた言葉。そして、先程みんなを前にした時の堂々とした姿……。

その時々を思い出す度に胸が締め付けられる。本当は千広の成長を喜ぶべきところなのに……。

千広が私の手を必要としなくなること。今、伝わってきたこの温もりが、いつかは手に入らなくなってしまうこと……。

そのことに、気付かされてしまった。

想像するだけで、胸が苦しくなる……。

「姉さん?」

そつと千広から身体を離す。なんだか、とても寒くなつた気がする……。

「ありがとう、もう大丈夫だから……」

いつか、千広が私から離れていつてしまつが来るのだろう。そうなつた時には、この温度が当たり前になるのかな……?

それならば、いつそのこと

「でも、よかつたね。みんなに受け入れてもらえて……」

「うん」

私の方から離れてしまおうか。そうすれば傷は軽くて済む筈だか  
ら……。

最初のうちはとても辛いと思つけれど、千広のためにもその方がいいのかもしない。

千広にはみんながいる。だから、私ひとりがいなくなつても生き  
と……。

「これで、また一人で一緒に通えるね」

「……えつー?」

「これからもよろしくね、姉さん」

「あつ……」

そう言つて、千広は自分の手で私の手をそつと包み込む。それは、  
とてもとても温かくて……。

「大好きだよ」

「

……どうして。

「お姉ちゃん……」

「どうしてこの子はこんなにも……。

「……つて。ね、姉さん? どうしてまた泣いてるのー?」

「……え?」

知らないうちに、また涙が溢れてしまつたらしい。でも、さつき  
までとは違う種類のもの。

嬉しい時も涙が出るというのは本当みたいだ。

「……千広が、意地悪だから……だよ？」

「ええっ！？ ボ、ボク何かしたつけ！？」

思いがけない私の言葉に慌てふためく千広。でも、嘘じやないよ  
……？

無理して、我慢して、諦めて決めた筈の私の決心。それを千広は  
たつたの一言で搖るがして、一言で崩壊させて、三言四言では粉々に  
したのだから……。

もう、元に戻すことは出来ない。

そんな意地悪な千広には仕返しをしないと……だよね？

千広がもう嫌だつて言つても、許してあげない。私の気が済むま  
では絶対に離れてあげないし、逃がしてもあげない……。

だから

「覚悟してね？ 千広……」

## 第九話 また一緒に…… 後編（後書き）

こんにちは、赤井 鈴です。

今回でようやく導入部の山場を越えることが出来ました。シリアスな話は苦手な方なので執筆に時間がかかってしまうのが難ですね……。

それでも今回の話があつてこそこの今後の展開があるので、避けて通ることも出来ず大変でしたが、これでようやく自由に話を書いていけると思うと嬉しいです。（と言つても後一話+は固定なのですが……）

それ以降は深雪たちの折りなすちょっとズレた日常をノンビリと描いていく予定です。なのでお時間が許されました時、また深雪たちにお付き合いいただけたら幸いです。

## 第十話 速水家の普通

「……はあ

最近、なんだかよく溜め息を吐いているような気がする。今日一日でも、もう何度したのかすら覚えていない。

溜め息を吐くと幸せが逃げるとよく言われるけれど、自然と出るもののは仕方がないと思う。

「……はあ

ああ、また……。

私がいつもして思っていること。それは言つまでもなく千広のこと……。

近頃は学校も段々忙しくなってきて、私とあの子の時間が噛み合わないこともしばしば。今日も『明日の授業の調べものがあるから図書館に寄つてくる』とのメールがさつき届いた。

それでも一緒にいたくて『手伝おうか?』と返信をしたけれど、『班ごとのグループ研究だから』『結構時間がかかりそうだから先に帰つてて』と返ってきた。

そんなこんなで、最近はなかなか一緒に時間をつくることが出来ていない(家では一緒にいるけれど、あのくらいでは全然足りない)。平たく言つてしまふと

千広分が完全に不足してしまつていた……。

去年と比べれば遙かに良くなつた。私は高校で、千広は中学校。あの時は休日を除けば、家か通学路の途中までしか一緒にいれなくて本当に寂しかつた。

それでも、人は一度上の生活をしてしまつとなかなか元の生活に

は戻れないものなのか。あの三日間を過ぎた後だとなんだか物足りないという感じだ。

せめて、私と千広が同じ学年、同じクラスとかだったならもっと一緒にいられると思うのだけど……。

.....  
.....  
.....

あれ？ これってしかして姉妹じゃない？

試しにさうっとだけ想像してみよ。

『ねえ、姉さん』  
『ん？ どうしたの？』  
『もつどの役員になるのか決めてない？』  
『つづくん、まだだよ。千広は？』  
『ボクもまだ決めてないんだけど。……姉さんそれよければ、一緒に図書委員をやらない？』  
『えつ？』

『いや、別に図書委員じゃなくてもいいんだけどね。保険委員とか美化委員とかでも。ただ、姉さんと一緒にやりたいなって……』

『うん、いいよ』

……いい。

『あ、しました……』

『どうしたの？ 千広』

『うん、実は数学の教科書を持つてくるの、忘れちゃったみたいで……』

『やつなんだ……。じゃあ、私の教科書を一緒に使おう？』

『えっ？』

『ほりほり、机ぐつけて？』

『うん、ありがとう姉さん』

『どういたしまして』

『……姉さん、ちょっとこい？』

『うん、いいよ？』

『この問題がなかなか解けなくて……』

『ああ、これは昨日習ったこの公式に当てはめるとXの値がでるでしょう？』

『あつ、そうか』

『後はもう一度自分で考えてみて？ またわからなくなったら教えてあげるから』

『うん。ありがとう、姉さん』

とてもいい。

『はい、千広。あーん』

『ね、姉さん。恥ずかしいよ……』

『いいじゃない。ねつ？ ほら、あーん』

『あ、あーん』

『どう？ 美味しい？』

『うん、美味しい』

『よかつた』

『……はい、あーん』

『ふえつ？』

『ボクだけ恥ずかしいのはずるによ……。だから、姉さんにもお返

し』

『わ、わかった……。あ、あーん』

『美味しい？』

『うん。とても、美味しいよ……』

すくべ、いい。

とっても甘い学校生活になりそうな予感。何だか無敵の未来が見えてきた気がする。

『い』

他にも千広と一緒に文化祭でお店をやつたり、千広と一緒に修学旅行に行つたりとかして

「おーい、速水。聞こえてないのか？」

「ひやうつ！？」

「うおつ！？」

と、背後からそんな幸せな想像にメスを入れる声が聞こえた。

「あー、すまん。驚かせるつもりはなかつたんだが、速水が廊下の  
ど真ん中で固まつてるのが見えたもんで……」

「……いえ、ありがとうござります」

その声の主は高橋先生。一年生の頃からの私のクラスの担任の先生。

「…………ん？　ところう」とはつまつ…………。

「まあ、とりあえずそれだけだな。あまり遅くならぬうちに帰れ  
よ?」

「あの、待つて下さい」

「ん？　どうした？」

「先生に、大事なお話があります」

「ここならいいか？」

「はい、あまり他の人には聞かれたくない話なので……」

ここは生徒相談室。基本的に先生と生徒が一対一で話をする」と  
が出来る部屋。込み入った話をしても外に漏れることがないよう  
防音にも気をつかつて造られている。

「それで、話というのは？　こんなところでないと話せないと  
いうことは、深刻な話なんだろう？」

「はい」

そう、深刻な話。私と千広の未来がかかつてているのだから。

「先生には『迷惑な話だと思います』

さすがに面倒はかかつてしまつ筈だ。それには少しだけ申し訳な  
く思う。

「でも、先生には私の気持ちを知つておいてもらいたくて……」

「ふむふむ……ん？ ちょっと待て。それはもしかしてアレ関連か？」

アレとは何だろう？ 思い当たるふしきは

……ああ、そうか。一週間前の集会のことだ。

考えてみれば私の相談なんて千広のことだと。そして、勘のいい人なら私が何を考えているのかさえも、すぐにわかるかもしない。……でも、それなら話が早い。

「はい、アレです」

そう答えると先生は苦い顔をする。

「……それは気の迷いだ。早まるな」

「気の迷いなんかじゃありません。私は本氣です」

勝手に決めつけないでほしい……。

「第一、俺には妻も子どももいる。それはお前も知っているだろ？ ？」

どうして先生の奥さんや子どもの話が出てくるんだ？ 「いや、そうか……。私に協力すれば先生の立場が悪くなるのかもしない。家庭を持つてる先生には頷き難い話なんだ……。でも

「はい、知っています。……でも、退くわけにはいきません」

「速水……」

私にも退けない理由があるから。

「だから先生、お願いします。私の気持ちを受け止めて下さい」

「もう……。だが、それでも？」

「私を留年させて、千広と同じクラスに編入させて下さい」

「俺にはあいつらを裏切るなんてことは……。…………何？」

あれ？ 何だか変な顔してる？

「ですから、私にもう一度千広と一緒に一年生をやらせてほしいんです」

「…………あー、すまん。盛大に勘違いしてたわ」

……何とだらうか？

「まあ、とりあえず俺から一畳畳ませてしまひつとすれば、それは無理だ。お前を留年させる理由がない」

「そんな……」

「じゃあ、お前から何かあげてみるか?」

「そう、ですね……。出席日数が足りないとか」

「お前、去年皆勤賞貰つてただろ?」

「じゃあ、成績不十分ではどうですか?」

「お前が成績不十分だったなら、今の一<sup>年</sup>は一桁も残らないぞ? 前回のテストなんか、たしか総合で七位だった筈だが」

「それは……、カンニングをしたから……とか」

「一番前の席でか? それに、俺の英語の最後の自由作文。文法まで完璧に、『私の家族』という内容で裏までぎつしり書いてたのは誰だつたかな? ……八割がた弟のことについて書かれていたが」

しまつた、あれは罷だつたのか……。

「……そうだ。実は私、留年しないと死んでしまう病なんです」

「そうだ。じゃないだら……。とりあえず、医師の診断書を先に持つてこい」

「うう……、手強い。このままでは私と千広のラブラブ姉弟計画……。いや、今は千広は女の子だからラブラブ姉妹計画かな? が潰れてしまひつ。何でもいい。他に何か理由はないものか……。」

「それじゃあ……」

「何やつてるの? 姉さん……」

「……え?」

先生と私の二人しかいない筈の部屋に響く、もうひとつの中の声。そ

れは

「千広……」

今のは鍵だった人物。私の弟の、千広。  
でも、どうして？ この部屋は確か  
……あつ。窓、全開になつてゐる……。

「もう、先生を困らせちゃ駄目じやない  
だつて……」

「だつて……」

千広とのラブラブな学校生活がかかつてゐるんだもん……。

「高橋先生。姉さんが変なことを言つて、すみませんでした……」

「いや、氣にするな。速水のブラウ……弟思いを知ることが出来て、  
なかなか面白……こほん。有意義な時間だつた」

なんだか、失礼なものを感じるのは氣のせい？

「そう言つていただけると助かります……。それじゃあ、ボクたち  
はこれで失礼しますね」

「ああ……。二人とも、氣を付けて帰れよ？」

「あつ、待つて……」

まだ話はついてな

「ほら、姉さん。早く行こいつ？」

「あ、うん……」

……我ながら、どうしてこの何度も引っ掛かるのかなあ。

頭でわかっていても、身体が無意識に反応してしまつ。  
そつと、千広から差し出された手。私は思わずその手を握つてしまふ……。

それはとても温かくて、柔らかくて

「……また、千広に負けちゃつた」

「えつと、何が……？」

その瞬間は、ラブ・ラブ姉妹計画が失敗してしまったことも「まあ、いいか」と思えてしまったのだった……。

……不覚。

「……で、今もそんな状態なわけね……。お疲れ様、ヒロ兄」

「お疲れ様、兄ちゃん」

「あははは……」

もう家には帰り着いた私たち。でも、あれからこの手は繋いだままだつた。失敗して失つた分は他の機会で補う必要があるので。千広分、現在も補給中……。

少しは貯まつてきたかな? ……うん。今、三パーセントくらい。

「……なあ、千広。実は父さんの左手が空いてるんだが」

「あらあら、それなら私が構つてあげましょつか」

「あだだだだだつ! ? 母さん、ギブツ、ギブツ……」

……ああ、お約束。

「本当に懲りないよね、お父さん」

「わかつててやるからね……」

「にゃあ……(やれやれ……)」(注…と、言つてゐるよつた気がする)

「父さん、大丈夫かな……」  
「利き手は右手だから大丈夫じゃない?」  
「いや、姉さん。それはちょっと違うよつた……」

だつて、あまりにも普通の光景だもの……。

でも

「どうかしたの？」  
姉さん。ボクの顔に何か付いてる？」「

普通」とは「変われない」とはどちらも幸せな」となんた  
なつて。最近、わかつたんだ……。

「ハハ、なんでもないよ……」

ヒルナンデス

なんでも……」「

つ  
た。

「うがああああああああああああああ！」

お父さん、うぬたー！

## 第十一話 野球少年の夢 前編（前書き）

今回の話以降は一話一話の独立性が高くなっています。

## 第十一話 野球少年の夢 前編

それは、突然の出来事だつた……。

「速水先輩っ！」

放課後の帰り支度をしていた時のこと。息を切らせた一人の女の子が私の教室に飛込んできた。

……確かに、千広のクラスメイトの子よね？

千広を呼びに行つた時に何度か見た覚えがある。

……と云ふ。

「速水先輩……。よかつた、まだ教室にいて……」

その子は私の姿を見付けると、ほんの少しだけ安心したようなそぶりを見せた。でも

「……千広に何かあつたの？」

彼女が私を訪れてきたということはそれ以外考えられない。

「は、はい……。千広君が、千広君が

「千広がどうしたの！？ 急いで落ち着いて、ゆっくり早く話してつ――！」

「おじおい深雪、それはさすがに無茶だ……」

「深雪ちゃんも、一度落ち着いて……」

春香と理奈の私をなだめるような声が聞こえるけど、それどころじゃない。落ち着けるわけがない。

「千広君が、野球部の人たちに連れていかれちゃつて……」

……野球部。

「場所はわかる！？」

「すみません、向こうの階段の方にとしか……」

「わかった。後は私がなんとかするから」

それを聞くやいなや、私は身を翻して教室を飛び出した。「深雪ちゃん！？」「ちゅうと、深雪……」と私を呼ぶ声を置き去りにして……。

……あそこ？

走り出してすぐ「田たついたのは、野次馬といった感じの生徒の集まり。それらが見つめているのは階段の踊り場の方。

『あ、あの。やめて下さ』……』

まだ少し距離があるためか小さくしか聞こえなかつたけど、私が聞き間違える筈がない。千広の、声……。

沸々と怒りの感情が沸き上がつてくる。

一体どうしてくれようか野球部……。とりあえず、一度と五体満足でグラウンドの土を踏めると思つたよ？

そんな私の心情は顔にも現れているのが、私に気が付いた野次馬たちは一斉に道を空ける。……毛散らす手間が省けた。

場所はもう目前。後は角を曲がればすぐ。早く千広を助け出していく

その後は徹底的に

「ちゅうと、野球部……。千広に手を出したり、まさかただで済むと思つて……？」

「あ、姉さん……」

呑きのめそつと思っていたのに……。

「えっと……。あれ？」

一体これはどういう状況ですか？

確かにそこには千広を囲む男子たちがいた。一、二、三……全部で十一人。みんな坊主頭で、上下とも白を基調としたユニフォームから話の通り野球部だろうということもわかる。

ここまで別におかしなところは無い……。

た  
だ

全員が土下座のスタイルというのはどういうことなのだろうか？

「千広？」

「ボクにもよくわからないんだけど、次の休みの日に隣町の学校と練習試合があるらしいくて……」

続  
け  
た。

「どうして？」

「それには俺からお話を聞いていただきます」！

そう言って、千広の田の前で下座をしていた部員がガバッと頭をあげた。

「ちなみに俺はキャプテンの佐藤です」

いえ、それは別に聞いてないですが……

これ以上話の進みが遅くなるのも嫌だから、野暮な突っ込みはよしておく。

「まず、今度陵町の学校と練習試合を行つたのは先程お話をした  
とおりなのですが

そこで一度言葉

後

「あやこには本当に腹の立つやつがいまして……」



と、千広。うん、最もな意見。

「例え試合で勝つても勝負に負けては意味がないんですよ」

「もはや最初から負けてる氣がするのは氣のせいかな?」

「他の女子に頼んでみるとかは……」

「あははは……。俺たちに女子の友達なんて一人もいませんよ」

「氣のせいじゃないみたい。駄目だ、この人たち……。」

私と千広はそっと溜め息を吐いた。

正直、彼らとは初対面。そこまで千広がしてあげる義理なんかもない。……本音を言つと、せつかくの千広との休日が潰されるのも面白くない。

だから、嫌味のひとつもと思つて聞いてみた。

「それって……。マネージャーってそんなに大事なものなんですか？」

つて……。だけど

「傍から見れば馬鹿らしさに思えるかもしません……。でも、俺たちにとつては本気になるに値することです」

返ってきたのは私の予想に反した答え。声も本当に同一人物のかと思える程に真剣なものに変わっていた。

「男には絶対に譲れない、譲つてはいけない場面がある。……親父の受け売りですが」

今までと打つて変わつて、表情も真面目さを伺わせる……斎藤さん?

「えと、キヤプテン。

「今回は正にその時じゃないかと思つてます。例え、プライドを捨てても絶対に……」

「佐藤さん……」

「そうだ、佐藤さんだつた。

「だから、元々は男だった速水君ならもしかしたら俺たちの気持ちをわかつてくれるんじゃないかなって。みんなと相談して決めたんで

す。すみません、『ちからばかりで勝手に』……

話を終えた佐藤さんは、少しきまりが悪そつに視線をそらして……。そのまま、しばらく黙つたままだった。

「…………いこすよ

「えつ！？」

少しの間、沈黙が続いた後……。

「ボクで力になれるのなら……」

「本当にですかっ！？」

千広は、はつきりと弓を受けるつて答えた。

「いいの？ 千広」

「うん。残念ながら野球部の皆さんの気持ちはわからなかつたんだけど……」

そう言つて、千広はちょっと苦笑い。

「ただ、『男には絶対に譲れない、譲つてはいけない場面がある』って言葉はちょっとだけわかる気がしたから……」

「そつか、そうだよね……」

千広には男の子的一面もあるのだから

「だから、なんか応援してあげたいなつて

「…………うん」

少し共感できるところがあつたのかもしれない。

「ありがとうございます……よつし、これでドローだ。後は試合に勝つて勝利といくぞ！――」

「…………おおおおおおおおおお――」

何だか不思議。わざまでは興味もなかつた筈なのに、今では野球部に頑張つてほしんなつて思つてる私がいる。

きっと、千広がマネージャーをするつて決めたからだけど……。

千広はきっと一生懸命にお手伝いをする筈だ。眞面目な子だもん。

それなら

「あの……」

「はい？」

「私も一緒に行つたら駄目ですか？」

私は、千広のことを応援してあげたい。そう思つた。

Γ Γ Γ .....

え  
あれ

「きたああああああああああああつーー。」

...はい？

「おやお嬢さんでーーー！」

「これ、勝ち確定じゃねえか？」

「うーん、三つとも金券でいいやつだね。」

「俺、マネージャーにホームランを捧げるわ！」

「あ、ずりい。じゃあ俺は……」

え？ あれ？ さつきの真面目な空気は？

「……ねえ、千広？」

「姉さんの考へてることほわかるけど……」

「…………はあ」

……やつぱつ男の子っぽくわからなー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4542m/>

---

私の弟姫

2010年10月9日12時11分発行